

次世代介護機器の活用事例について

1. 施設概要

ツクイ・サンシャイン足立は、周囲に公園や小学校などがあり、地域の活気を感じながら、穏やかな時間を過ごせる立地にあります。

認知症のあるお客様への対応に強みを持ち、スタッフはお客様お一人おひとりの夢や「やりたいこと」の実現を支援できるよう、日々のケアに取り組んでいます。

同施設では、介護テクノロジーの活用を進めるため、以前から※インカムアプリや介護記録ソフトを導入していました。

※インカムアプリ＝スマートフォンを無線機のように使い、離れた相手とリアルタイムで通話できるアプリ

また、出勤するスタッフが1人1台ずつ業務用スマートフォンを所持することで、各種アプリや介護記録ソフトを日常業務の中で活用できる環境を整備していました。



2. 導入した次世代機器

同施設では、令和6年度に株式会社 Z-Works（ジーワークス）が提供する介護支援システム「ライブコネクト」をすべての居室（54 室）に導入しました。

「ライブコネクト」は、ベッドの下や居室のドアなどに設置したセンサーを通じて、お客様の状態や居室内の状況を遠隔で確認できるシステムです。主に以下の情報を把握できます。

- ・ベッド在・不在、離床の有無
- ・睡眠の深さや質
- ・室内における活動の有無
- ・呼吸や心拍などのバイタルサインの情報
- ・トイレに行った回数

また、あらかじめ通知対象とする内容を設定することで、スタッフの業務用スマートフォンや介護ステーションへ通知が届く仕組みとなっています。



3. 導入経緯

導入前から介護現場の人員体制と業務量のバランスに関して、以下のような課題が挙げられていました。

- ・人員に限りがある中で、夜間を含めた見守り体制を維持する必要があること
- ・記録、巡視、コール対応など、多岐にわたる業務への対応が求められていること
- ・全室を訪室する巡視において、夜勤スタッフの移動や確認業務が多いこと

そこで同施設では、スタッフがより質の高いケアに専念できる環境づくりと、お客様の状態把握の質の向上を目的として、本システムを導入しました。

4. 導入準備

同施設では、スタッフがスムーズに運用を開始できるよう、導入前から役割分担、操作説明、連絡体制、トラブル対応の4点について準備しました。

①プロジェクトメンバーの役割分担を明確化

導入を一部のスタッフだけに任せてしまうことのないよう、同施設では下記のようにプロジェクトメンバーと役割を設定しました。

- 全体の意思決定：施設長
- プロジェクト推進メンバー：各フロアの介護スタッフ1名ずつ
- メーカーの担当者との連絡窓口：生活相談員
- 通知設定の取りまとめ：機能訓練指導員
- 睡眠状況のアセスメント、医療連携：看護スタッフ
- ケアプランへの反映：計画作成担当者
- 活用サポート、メンテナンスに関する連絡：本社の営業部IT推進課

この体制により、介護スタッフだけでなく、看護スタッフ、生活相談員、機能訓練指導員、計画作成担当者、本社の営業部IT推進課がそれぞれの専門性を生かしながら導入に関われるようにしました。

②マニュアル・動画の配布

- ・マニュアルは写真を多く使用し、誰が見ても操作手順を確認しやすいよう、シンプルな構成にしました。
- ・スタッフが操作方法を具体的に理解できるよう、実際にライブコネクトを使用している場면을撮影した動画を用意しました。

③メーカーの担当者との連携

- ・メーカーの担当者に定期的な研修を実施していただき、スタッフがシステム運用に関する疑問点を確認できる機会を設けました。
- ・メーカーの担当者への連絡窓口を生活相談員に集約し、指示や情報の行き違いが起きないようにしました。

④使用方法とトラブル対応の周知

- ・トラブル発生時の報告経路を明確にし、発生内容をプロジェクトメンバーに集約できる体制を整えました。
- ・プロジェクトメンバーは、発生したトラブルの内容と対応方法をスタッフへ随時共有し、同様の事象が起きた際に迅速に対応できるようにしました。

5. 導入による効果と施設の活性化

ライブコネクトの導入効果を把握するため、導入前後に介護スタッフを対象としたアンケートを実施しました。

また、夜勤時の業務効率の変化を客観的に確認するため、同施設では夜間の訪室回数を計測し、スマートフォンアプリを用いて夜勤スタッフの歩数も測定しました。

■定量効果について

導入後、夜間の訪室回数は **175～199 回から 45～69 回**に減少し、夜勤スタッフの平均歩数も **12,038 歩から 8,589 歩**に減少しました。

これは、従来の定時巡視を見直し、ライブコネクトの通知や居室状況を確認したうえで、必要に応じた訪室へと切り替えたためです。その結果、夜勤スタッフの確認業務が効率化され、他の業務に充てられる時間も増えました。

■見守りシステム導入後のスタッフの感想

- ・「夜間の定時巡回の回数が減り、他の業務にも取り組めるようになった。」
- ・「状況確認を目的とした訪室が減ったことで、業務の進め方にゆとりが生まれた。」
- ・「通知音を変更したことで何のコールかが分かりやすくなり、適切に対応できるようになった。」
- ・「夜間帯の睡眠状態をデータで可視化でき、医療機関との連携に役立っている。」
といった声がありました。

業務にゆとりが生まれたことで、スタッフ同士の情報共有やお客様への関わりにも時間を充てやすくなり、職場活性化につながったと考えます。

■お客様から

- ・「夜、スタッフさんが来て起きてしまうことが減ったよ」
といった声をいただきました。
- 入眠されているお客様への不要な訪室をしないことで、睡眠環境の向上にもつながっていると考えます。

6. 課題と解決策

■課題点とその要因

●夜勤スタッフについては、業務の効率化が実感できた一方で、複数の通知が発生した際の対応や判断に難しさを感じる場面があるという意見がありました。

⇒その要因として、複数のセンサーが同時に作動することや、誤作動と思われる通知が発生することが挙げられます。

夜勤スタッフは通知の内容を確認し、適切な対応を選択する必要があるため、判断に迷う場面ではさらなる運用の工夫が求められています。

また、同施設では全居室にライブコネクトを導入しているため、設定内容によってはセンサーの通知が頻発することがあります。そのため、スタッフが必要な情報を適切に把握できる環境づくりが求められています。

●ライブコネクトの操作方法の習得状況には、スタッフ間で差がありました。

⇒その要因として、機器導入の目的や有用性がすべてのスタッフに十分伝わっていなかったことが考えられます。

導入の目的を十分に理解できていないスタッフにとっては、ライブコネクトの操作そのものが新たな業務の増加として受け止められている可能性があります。

また、なじみのないIT機器の操作に不慣れなスタッフがいることも要因の一つと考えられます。

■課題に対する改善策

〈通知設定に関する改善〉

●プロジェクトメンバーは、お客様の状態をこまめに共有し、アラート設定を追加するだけでなく、必要に応じて既存設定も精査しました。

●プロジェクトメンバーと各フロアのスタッフがアラート設定を検討する時間を設け、必要な通知を適切に受信できるよう調整しました。

●アラート設定の検討と決定、スタッフへの周知までの流れを統一し、「いつの間にか設定されていた」「なぜ設定されたのか分からない」といった不安を解消しました。

●アセスメント実施時には、担当スタッフがセンサー位置の確認・検討を行う項目を追加しました。

●お客様のADL等に急激な変化があった場合は、担当スタッフとプロジェクトメンバーがその都度アラート設定を見直しました。

〈導入目的の共有に関する改善〉

●夕礼などの日々の情報共有の場で、ライブコネクトの導入によって業務が効率化した事例を共有することで、スタッフが導入効果を具体的に理解できる機会を増やしました。

●施設内会議では、施設長が導入の目的や施設全体で取り組む意義を説明し、スタッフの理解を深めました。

〈操作習得に関する改善〉

●プロジェクトメンバーは、操作に慣れていないスタッフに対して、マニュアルや動画を案内するだけでなく、実際に一緒に操作する伴走支援を行いました。

7. 総括／今後の展望

●ライブコネクトの導入により、従来はスタッフの訪室により行っていた夜間巡視や状態確認の一部を、センサー通知と居室状況の確認によって補えるようになりました。その結果、夜間の訪室回数や歩数が減少し、スタッフの働きやすさの向上につながりました。

●一方で、通知数の多さや操作の習得状況の差により、一部のスタッフには戸惑いも残っています。

そのため、今後はアラート設定の見直し、導入目的の共有、操作支援を継続し、ライブコネクトを使いやすい仕組みにしていく必要があります。

導入過程では、プロジェクトメンバーを中心に多職種が関わったことで、スタッフ間のコミュニケーションや協力体制を見直すきっかけにもなりました。

●今後、同施設ではライブコネクトをさらに有効活用するため、施設内だけでなく、メーカーや当社の他の導入施設とも情報交換・意見交換を行っていきます。そこで得た知見を活用し、通知設定や運用方法の改善につなげていきたいと考えています。

●現場から新たな要望や意見があった場合には、他の機器の導入についても検討していきます。

●ライブコネクトの導入により、夜間巡視や状態確認の方法など、業務の進め方に変化が生まれています。今後も、現場の声を踏まえながら運用を改善し、介護テクノロジーを活用した質の高いケアと働きやすい職場づくりにつなげていきます。